



キュウリの早進化栽培における 誘引枝の更新が生育、収量、作業性に及ぼす影響

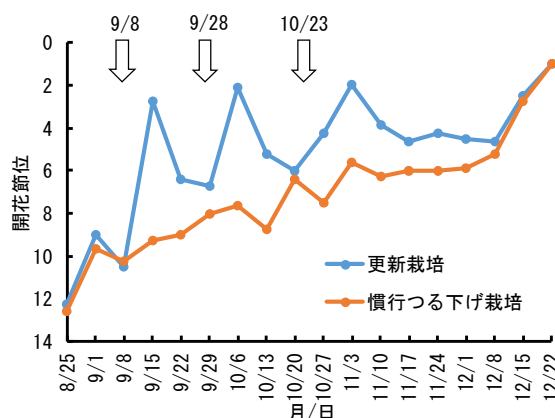


図1 開花節位の推移

注) 図中の矢印は摘心日。なお、最初の摘心は誘引枝の上位10節の雌花率が5割以上となった時点で実施し、両区とも12/9に最終摘心を行った。

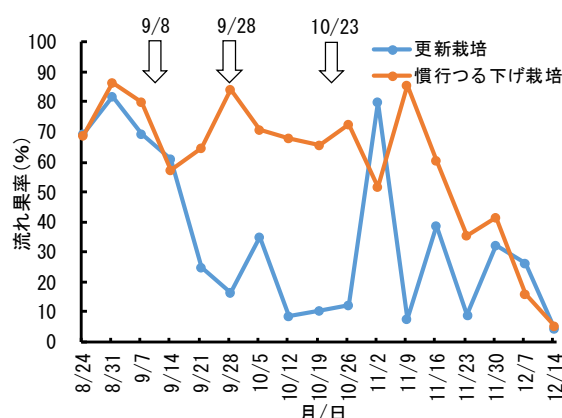


図2 流れ果率の推移

注) 表示日から7日間の平均値



写真1 更新栽培における着果状況

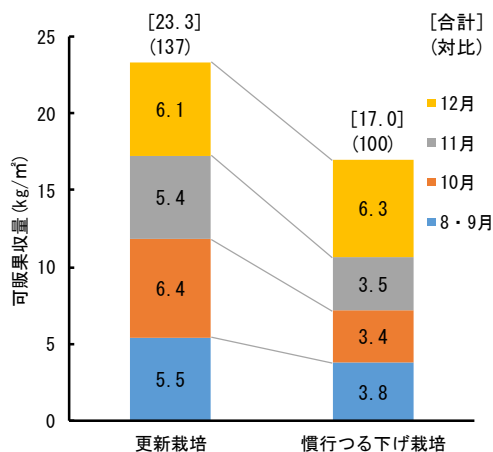


図3 更新栽培が可販果収量に及ぼす影響

注1) 可販果収量はJA高知県出荷規格のA、B品

注2) 対比は慣行つる下げ栽培を100とした時の指数

注3) 収穫期間は8/28～12/31

表1 つる下ろし作業の
月別回数

	更新栽培	慣行 つる下げ 栽培
8月	3	3
9月	6	8
10月	3	7
11月	4	5
12月	2	2
合計	18	25

農業技術センターでは、ハウスキュウリの早進化多収生産技術の開発に取り組んでいますが、慣行のつる下げ栽培では高温期に誘引枝の伸長が速く、開花位置が下がって流れ果が増加することや、つる下ろし作業に多くの労働力がかかることが問題となっています。そこで、誘引枝を摘心し、摘心部直下より発生する側枝を誘引する更新栽培について、生育、収量、作業性を調査しました。

2020年8月5日定植の養液栽培で12月末まで収穫し、品種に‘常翔661’（台木‘RK-3’）を用いました。誘引枝が前回の更

新位置から約10節伸びたときに摘心を行った場合、慣行つる下げ栽培と比べて開花節位が上がり（図1）、流れ果率が低くなり（図2、写真1）、収量が著しく多くなりました（図3）。また、つる下ろし作業は合計で7回少なく（表1）、省力化となりました。

本研究は、内閣府地方大学・地域産業創生交付金「“IoP (Internet of Plants)” が導く「Next 次世代型施設園芸農業」への進化」の助成を受けたものです。

（先端生産システム担当 穂崎健昌

088-863-4918）